地域情報（県別）

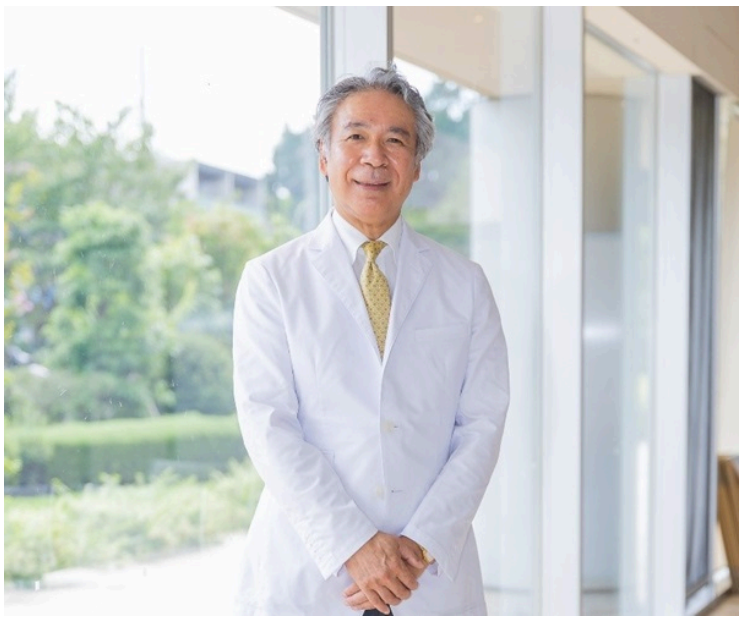
【東京】杉並区初の大学病院「付属の強み生かし、地域から信頼を」-市村正一・杏林大学医学部付属杉並病院病院長に聞く◆Vol.1

立正佼成会から事業譲渡、小児科と眼科が特徴

2025年2月14日 (金)配信 m3.com地域版

2024年4月、杉並区和田に開院した「杏林大学医学部付属杉並病院」。同区では初となる大学病院の誕生にインパクトを感じる地域住民や医療関係者は少なくないと想像されるが、実際にどのような特徴を持つのか。過去に同大付属病院の病院長も務めた市村正一病院長は、医師の継続性など人的体制のメリットを挙げ、「付属病院の強みを生かしつつ、地域に根付いた病院として信頼を得ていきたい」と話す。（2024年12月9日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら



市村正一氏（病院提供）

――ホームページなどによると、杏林大学医学部付属杉並病院は佼成病院から移行する形で開院したとあります。まずは、開設の経緯についてお聞かせください。

佼成病院を運営していた宗教法人立正佼成会から事業譲渡されて当院が生まれました。佼成病院は1952年に中野区に開設して2014年に杉並区和田のこの地に移転し、そのころから学校法人杏林学園を母体とする杏林大学医学部付属病院が佼成会の協力病院として関係を築いてきました。

佼成会が経営を担い、医師の派遣など診療面は杏林学園が協力する形で運営してきましたが、より時代に合った経営の推進と良質な医療の安定供給を図るために事業譲渡の話が持ち上がったのです。私は2022年8月に佼成病院の院長に就任し、スムーズに新しい病院がスタートできるよう、とりわけ患者さんにご迷惑がかからないよう移行に向けて慎重に取り組んできました。

杏林大学が医師を派遣、医療の安定性を担保

――杉並区では初となる大学病院の誕生にインパクトを感じました。どんな病院を目指しているのでしょうか。

大学の付属病院でありながら、地域に根差した病院の側面も持つのが当院の特徴です。付属病院の強みとしてはまず、医師の継続性が挙げられます。一般病院の場合、主軸を担っていた医師が辞めて他大学出身の医師が入職する

と、その病院の医療が変わる可能性があります。しかし、当院では杏林大学の各医局から医師が派遣されているため、医療を継続していく上での安定性が担保されています。

人的体制の面では、積極的に学会活動を行ってきた医師が診療しているのもポイントです。教育を担う大学の特性から、当院の医師は現在の医療の先端情報に精通しており、三鷹市にある医学部付属病院とも緊密に連携しています。例えば、近年進歩しているがんゲノム医療を医学部付属病院では行っているので、必要に応じて当院の患者さんを紹介することができます。当院には腫瘍内科医も非常勤で勤務しているため、より高度な医療が必要かどうかの判断や大学との連携を行いやすい点はメリットと言えるでしょう。

杉並・中野唯一の小児二次救急、24時間365日診療

――ホームページでは、診療面の特徴に小児科と眼科を挙げています。

この二つの診療科は当院の強みです。小児科は常勤医10人の体制で24時間365日診療しており、東京都の小児科二次救急医療機関にも指定されています。杉並区と隣の中野区で小児の二次救急を行っているのは当院だけであり、21床を備えます。中野区に小児専用のベッドを持つ医療機関はなく、杉並区で小児疾患の救急対応をして入院もできるのは当院のみです。

実際のところ、小児診療は経営面ではマイナスなところが多く、しかも将来的な小児人口の減少予測などを受け、小児科を標ぼうする病院は減っています。しかし、子どもは急に発熱などをするもの。当院が小児救急を続けなければ地域の方が困ってしまうおそれがあるので、「杉並区・中野区で小児診療の火を消さない」をモットーに診療しているのです。地域の親御さん・お子さんを支える意味では、杉並区が運営する病児保育の協力医療機関として、保育室「しーず」が当院に併設されています。

付属病院が強みとする眼科診療を杉並でも

――ホームページの眼科の説明には「高度で専門性の高い診療を提供」とあります。

三鷹の杏林大学医学部付属病院は眼科疾患の診療件数が多く、都内の大学病院では東京医科大学と並んで「双璧をなす」と言われています。そこで、大学の特徴を当院にも取り入れようと新しく赴任した教授や准教授に診療を担っていただき、高いレベルの手術が可能になりました。これまで地域ではできなかった緑内障や網膜硝子体疾患、加齢黄斑変性症、小児眼科の治療・手術などができるようになったのは大きな変化です。

――病院のもう一方の特徴である「地域に根差した」点での取り組みはいかがでしょうか。

今の時代、病院を安定して経営していくには地域の患者さんや開業医の先生方からの信頼は欠かせません。そのため、開院時から地域連携には力を入れており、当院が所属する杉並区医師会に病院の情報をお伝えしたり、世田谷区医師会の先生方には実際に当院を見学していただいたりしました。こうした活動の結果もあり、初診の紹介率は60%以上に増え、また、開院前には40%以下だった逆紹介率は80%ほどまで増えています。

◆市村 正一（いちむら・しょういち）氏

1980年慶應義塾大学医学部卒。2009年杏林大学医学部整形外科臨床教授、2011年杏林大学医学部整形外科学教室教授、2018年杏林大学医学部付属病院病院長、2024年4月から現職。専門は脊椎脊髄外科。日本整形外科学会専門医、日本脊椎脊髄病学会脊椎脊髄外科指導医など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】